

はじめに

唐突だが、英語を上達させるのに賢い手法はあるのだろうか。学問に王道なし、といわれるが、人は少しでも楽な道があれば、と願うものだ。昭和三九年の東京オリンピック開催が決定したときのこと。爆発的な喜びが日本中に広がり、名実ともに戦後が終わり、一流国入りしたような気分を味わったものだ。私自身はまだ大学生だったが、そのとき、にわかには日本中で英語ブームが起きたことを覚えている。二〇二〇年、二度目の東京オリンピックでも同じようなブームが起きるのだろうか、強い関心を抱いている。

当時、簡単に英語ができるようになる、と謳った何冊かの本がブームのきっかけをつくっている。以来、数えきれないほど英語上達法に関する本が出た。百万部を超え大ベストセラーとなった英語本が何冊が続いたため、柳の下の一匹目のドジョウを狙って同業者

が続々と参入したが、その後ブームを巻き起こすような本は出ていない。本に魅力がないからか、あるいは我が同胞にとって英語はすでに身近な道具になった結果だろうか。だが、どこの本屋にも英語コーナーが設けられ、数えきれないほどの英語学習本が依然として並んでいる。手にとって見ると、内容にたいした差はなく大同小異である。こうなると、それぞれの本が本屋の店頭で牽制しあい、やがて埋没していく様子が容易に想像できようというものだ。

バブル経済がはじけ不況に陥ってから久しい。日本の大企業が次々に倒産、あるいは外資に乗っ取られるのは日常茶飯事となった。パソコンですらかつてのような勢いはなく、中国、韓国、台湾に追い上げられている。日産自動車ではフランス人が社長になって久しい。会社内の公用語も英語になった。それでいて、海外に出かける日本人は二〇〇〇万人を超え、日本を訪れる外国人も三〇〇〇万人に及ぶ勢いだ。かと思えば、老後に不安を抱く退職者が安い生活費に誘われ、海外に居を移すことを前提に英会話教室に通うのも日常の景色となってきた。

アメリカやオーストラリアなどの外資系銀行が派手な広告と高金利で、外貨預金への乗り換えを大々的に宣伝し、誰もが自分の貯金の一部を外貨預金するのも当たり前になった。

こうした現象からいえることは、英語が日本における日常生活のなかにほぼ浸透したことであり、同時にソーシャルネットワーク時代の到来とともに最新情報にアクセスするために英語が必須となったということだろう。

インターネットを苦勞なく、自由に駆使できる世代が今や社会の主流となった。そして、彼らに共通している点は単に情報源を英語に頼るばかりでなく、自らの声を広く世界に向けて発信できる能力を身につけてきていることだ。

だから、英語上達への熱意も第一次ブームから第二次ブーム（海外旅行全盛時代）、そして現在の第三次ブームへと飛躍し続けるにつれ、大きな質的変化が起きているともいえる。第一次ブームではオリピックで日本にやって来る外国観光客を想定しての英語だった。街中で外国人に道を聞かれる、駅で切符の買い方を聞かれるといった、その場しのぎの緊急対策英語といってもよかった。

第二次ブームでは日本人自身が主役に躍り出るようになった。外国でのホテルの予約、買い物、あるいは観光地での若干の歴史のお勉強にも英語が欠かせなくなった。情報は日本語ではなく英語が優先する時代の到来である。

第三次ブームは英語開国時代とさえ呼ばれ、小学校から英語が教科に加えられるご時世

となった。

今や普通の生活圏のなかに英語が浸透・定着した。非日常語から日常語に昇格したといってもいい。若い世代の間では西欧で放映される番組を吹き替えなしで見たがる。俳優の声を生で聞かないと気分が乗らないとさえいう。一日中、AFN(旧FEN)のラジオを聞きながら過ごす子供たちも多い。彼らは臆することなくメールや携帯電話で音楽のリンクエストをラジオ局にする。もちろん英語である。外国の商品カタログを見てインターネットで直接注文するのも当たり前前の光景となった。英語は欠かすことのできない手段となり、使えなければ一級の情報も入手できず、いい仕事にもありつけない時代である。

私の周辺に結婚したばかりの若い夫婦がいる。共稼ぎである。しかし、聞いてみると奥さんは外資系企業に勤め、すでに年俸一五〇〇万円を超えている。一方、彼氏のほうはカナダの大学を出ているのに年俸は五〇〇万円に届かない。奥さんの三分の一しかない。なぜこれほどの格差が生じたのか。ひとえに英語の質の差である。彼女はディーラーをしているのに、彼氏は単なる事務系英語屋さんだからだ。

昔はしゃべれさえすればよかった。それだけで他人と違う、かっこいい、という一種の

ブランド価値があった。それが今や専門の領域でも必須の資格となった。電車のつり革広告を見ただけでも、英会話教室がいかに繁盛しているか推察できようというものだ。駅前英会話教室など、ビジネスとしては行き着くところまできた感じがする。それもここ近年急激に変化してしまった。フィリピンに本拠地を置き、英会話の授業をネットで、一対一でおこなう事業が軌道に乗り始めている。その上、最後の仕上げに現地に出かけ、磨きをつける。英語の勉強のためにフィリピンに出かけることなどかつて想像できただろうか。

それに拍車をかけているのが若い両親の行動である。自分たちができなかった夢を子供に託し、スポーツや習い事に熱を入れるからだ。そのなかで最も人気があるのが歌との連携による英語である。幼稚園でもネイティブの英語の先生を配置すると園児が殺到するという。同時に母親の英会話教室を併設するところさえ出始めている。

そんな折、出版社から英語本に関する話が持ち込まれてきた。私の恥多き英語修行時代をもとに英語が上達できる秘伝を披露せよ、という。そんなものは当然ありえないし、私自身いまだに英語に悩まされているのが実情だから逡巡した。書けることといえば、どれほど長い時間を無駄にしてきたか、また、英語を上達させようとどれほど苦しんだか、いやいまだに苦しんでいるか、その体験を披露するくらいしかできない。出版社はそれでも

いいという。その苦しみの過程が、これから英語を本格的に習おうとする日本人には役立つのだという。それが英語の本を書いてみようか、という気持ちになった発端だった。

しかし、それほど真剣に考えたわけではない。酒を飲みながら、思いついたことをそのままパソコンに入力し、ある程度の量がたまった段階で編集者の判断を乞うた。それがどうしたことだろう。あれよ、あれよという間に一人歩きを始め、半年も経たないうちに出版物になってしまった。しかし、完成したのを見ると、自分が狙っていた本とはちよつとかけ離れていた。出版社と事前に充分な打ち合わせをしなかったのだから当然といえば当然なのだが。

編集者の意向は充分理解できた。英語ブームにあやかり、かつ、英語を上手になりたい人がごまんといる世の中で、もう一冊のさらなるHow toモノを出そうとしたのだった。私は、今まで話題にもならなかった新しいジャンルの本を出したいと考えていた。すなわち、英語を主題としながらも、英語学習書とはちよつと毛色の違う、すなわち英語物語のようなエッセイ集を出したかったのだ。

本を出版してもらいながらこんなことをいうのも申し訳ないのだが、書き手としての欲求不満がたまり始めたのも事実である。ならば、もう一冊挑戦するしかあるまい。それが

今回の試みである。成功したかどうか、それは読者の判断に任せるしかない。

腰かけ程度だったが、アドバイザーとして働いたNGOの一つに東京財団（二〇一六年三月二六日「公益財団法人東京財団政策研究所」に名称変更）がある。新しく創設された財団で、当初の志は高かった。政府に頼らない本格的なシンクタンクを作ろうという意気込みだった。東京をニューヨーク、パリ、ロンドン、あるいはベルリンと対比できるような世界的情報発信基地にするのが夢だったらしい。そのため、発足間際は毛色の変った講師を招き、自主講座を開催し、啓発と情報発信に余念がなかった。

それが今や政府関連機関と思われるってしまうほど官僚の横滑りが激しく、当初の志とはまったく違う方向に進んでしまったが……。

その会合に何度か顔を出した。もちろん聴衆の一人としてである。そのうち、私の存在に気づいた財団の関係者からこんなことをいわれてしまった。

「英語を武器に、お前さんは世界のホットな人材や情報を集めているようだな。どうだ、できればそのやり方をここでしゃべってみたら」

人様に語れるほどのものは何ももっていないが、自分なりに学習してきた経験則が少し

でも他の人の役に立てばいいのだからという誘いに甘え、四回ほど英語圏での生活を中心に個人的体験を話すことになった。義務を果たしたあと、時の経過とともにいつしか忘れてしまったが、一年半も経ったころ、その議事録とやらが送られてきた。読み直してみると赤面することばかりだ。本来の主題からややもすると脱線し、英語そのものよりも、英語を使うことによる情報収集に力点が置かれ多くの時間を費やしているのだった。

ということで、今回はその一部を参考にし、本著の意向に沿うよう編集しなおしてみた。編集にあたって特に気を配ったことがいくつかある。いかなる時代が来ようとも（もちろん、アメリカが日本を州に編入する、あるいは日本人が自らアメリカの一部になることを望んだ場合は別だが）、ネイティブの英語を完全に真似る必要はない（どうしても願う人は勝手にどうぞ、というしかないが。それはそれで一応の目的を達成できるのだし、本人にとってはすばらしいことなのだから）。一般的に言えば日本式英語で何ら問題はない、大丈夫だということ強調しておきたい。英語圏で生まれ育った帰国子女は別として、通常、英語を学びたいと切実に感じるのは実社会に出たときである。早くても二〇歳前後、平均的には三〇歳前後ではなからうか。だから、この本は英語を上手になりたいという人にはあまり役立たない。むしろ、英語を使って何をつかむか。その道の極意を探ろうとしている人への

一助になつてほしいという願いから、筆者が己の無学を承知の上で著したものと理解していただければありがたい。

はじめに *i*

第1章

国際語としての英語について

英語は国際語、母国語にあらず 2

英語は手段に過ぎない 6

いかにして英語コンプレックスを乗り越えるか 9

学習の方法は人それぞれ 17

英語は敵性語？——本質を見極める力をつけよう 22

英語道を究める動機づけ 23

第2章

情報収集力がすべてを決める

リーダーたちの英語 29

自己主張ができる言葉 33

英語の地域特性とは何か 38

我流英語のすすめ 40

英語と情報収集は表裏一体 44

どんな情報を集めるのか 52

情報は五感で集めるもの 59

感性の重要性を再認識しよう 62

自然のなかに何かが見える 67

野生の声を聴く 72

葦の髄から天井を覗く 75

情報を得るのも英語 80

情報力と英語力

情報の裏を読む	90
アラブ式情報コントロール	93
リメンバー・パール・ハーバー	97
情報の奇々怪々	98
英語使いの効用	99
捕鯨禁止に訳あり	104
情報にはいつも裏がある	109
イデオロギー・フリーを求めて	116
サイバー戦争に見る情報化社会の行方	

第4章

情報力と英語力を鍛える実践現場——国際ペンクラブの体験を通じて

作家の集合体・ペンとその存在意義 128

サロン活動の真髄 133

水泳と文学はつながっている 140

国際ペンクラブの人間模様 148

平和をめぐり会議は踊る 155

平和委員会の無力化 162

それでも希望は捨てず 164

第5章

応用編

英語で原稿を書くための基本心得 170

記事を書くにあたって留意すべき七つのポイント

172

評論（コメンタリー）、コラムを書くにあたっての留意点 174

スピーチを実践してみよう 185

スピーチ原稿の作成過程を検証する 190

スピーチ原稿の基本と本質——家を新築するときの自主設計図と同じ感性で
世界の指導者たちのスピーチから学ぶ 224

おわりに 231

英語は国際語、母国語にあらず

冒頭から私事^{ワタクシゴト}で恐縮だが、子供がオーストラリアのシドニーで生まれたものだから、私は、英語圏の国に住んでいるという利点をこの際フルに活用し、子供には初めから英語で話しかけるよう努力してみた。今から振り返ってみれば子供を実験台にしたわけである。だから、子供の口から初めて出た言葉が「ノー」だったとき、お父さんは万歳した。大脳に最初にインプットされた言葉が英語と思っただけで舞い上がったのだから、ノーテンキといわれても仕方あるまい。大人の反応を敏感に察知したためか、あるいは大人が振り回されるのが面白かったのか、以来、子供は何事につけ「ノー」を連発した。

親バカぶりはこのとき以来で、なんとかして英語を日本語と同じように使えるような教育環境を用意してあげたいと思うようになった。しかし、仕事のほうは個人のわがままをそれほど容易に聞き入れてくれるわけではない。一年半足らずして帰国となった。それからだ、我が家の実際の英語教育奮闘が始まるのは。

ともかくできるだけ英語環境にさらすことを心がけ、昼は物語を中心とするテープやビデオを見せ、寝るときは英語の絵本の読み聞かせを続けた。二、三年続けるうちに、読み

聞かせた本ならすべて暗誦できるほどになった。もちろん、親子ともどもだが。

四歳になったとき、東京タワーの近くにインターナショナル・プリ・スクールがあり、校長先生がオーストラリア人だというのを聞きつけ、早速会いに行った。教会付属の施設で週三日制であった。私たちの住まいは浦安で、まだデイズニールランドも開設されておらず、ようやく湾岸道路が開通したばかりだった。

以来、週三回、私どもは早朝に家を出て湾岸道路をひた走り、子供をプリ・スクールに送り届けるのがルーティーンとなった。学校は午前中だけだったから、その間、両親は家にいったん帰るというわけにもいかず、結局、三時間あまりの時間を持て余し、喫茶店をうろうろすることになった。学校では歌の練習や庭での団体遊戯、工作、お絵かきなどが中心だったが、英語は目を見張るばかりの進歩を見せた。ひとえに環境のなせる技だろう。

もちろんすべてが順調であったわけではない。とりわけ、本人の精神的負担は想像を超えていた。当時、両親とも日本人でありながら子弟をこうした学校に通わせるのは例外中の例外だった。大半は国際化の波を親が感じとり、先行教育投資の形で行われた。ただ、私が承知している限り、一二年を経たずして方向転換を余儀なくされたようだ。子供が馴染めないとともに、親もまた環境に適応していくことの困難さを実感したからだ。我が

家も同様で、さまざまな文化摩擦を体験した。無事修了できたのは幸運としかいいようがない。

やがて小学校に進級するときがきた。家では子供をどここの学校に入れるかで連日、議論が続いた。基本的問題は、これほどまで苦労させて子供を英語環境のなかに置かなければならない背景は何なのか、将来に対する明確な目的があるのか、あるにしてもその選択は子供にあるのであって親にはない等々、議論が尽きることはなかった。

日本の義務教育から子供をはずし、東京にあるインターナショナル・スクールに送るところから生じるもろもろのインパクトを予測することは不可能だったし、我々の想像力をはるかに超える難問ですらあった。その間も子供の英語に関する能力は飛躍し続けた。とりわけ英語を聞く能力は親をはるかに超えた。

ある日のことだった。意を決した母親が東京で名の知れたインターナショナル・スクールに進学相談をするからといって出かけていった。しかし、相談に要した実際の時間はごくわずからしく、彼女は日がな一日正門近くの前に立ち、生徒たちの行動を一部始終観察し続けてきたのだった。そして、帰宅するや一言「どう考えても、これがベストの選択とは思えない。まずは日本人として育てるのが常道で、日本の教育システムに子供を戻

したい」。

彼女の話を詳しく聞いているうちに、私は反論する根拠を失ってしまった。

それから苦しんだのは子供のほうだった。国内での文化摩擦に巻き込まれてしまったからだ。まったく違う環境に投げ出されたのだから、その葛藤は想像を超えていたはずだ。

しかし、親としてはなんとかして身につけた英語だけはそのまま維持させてやりたい。結局、プリ・スクールの先生に家庭教師として家に来てもらったり、別に英語のレッスンに通わせたりして最低限のレベル維持を図ることにした。

それにしても小学校の六年間は長い。周囲の子供たちは三、四年生ごろからすでに中学への進学を目指し塾に通い始める。となると一人だけ他のクラスメートと違った勉強を続けさせるのは親にとっても、また本人にとっても悩みとなる。

ある程度クラスの動きと歩調を合わせながら、幼児時代に身につけた英語感覚を最低限維持することに努め、中学進学まで中断させることなく維持させることに成功したが、振り返ってみれば僥倖としかいいようがない。ただ、そのおかげだろうか、英語力、とりわけ聞く能力が身についたことは間違いない。それが国際的な会議に出ても気後れせず対処できるようになった一つの成果だろうか。かといってそれが最良の方法かどうか自信はな

い。結果としてそうだっただけのことだ。

中学になれば英語が正課となる。後は英語の先生を中心に、学校の方針に任せておけば本人もおのずとその環境のなかで学習するようになる。

英語は手段に過ぎない

英語教育に関する身近な体験談は尽きないが、強調したいのは、日本という環境のなかで英語環境を維持させていくのは並大抵のことではないということだ。そして、その努力の割には限られた結果しか生まれないことも事実である。

日本で生活する限り、どこかの時点で過酷な受験戦争に巻き込まれることは避けられない。となれば、せいぜい子供時代の学習成果として残るのは *native* に近い英語の発音能力くらいではないか。それほど時間、労力、資金をそそぎ、家族全体が苦勞する必要はどこにあるのだろうか。当然の疑問である。

だから、この本はそうした特殊なケースを想定しているわけではない。ごく普通の平均的日本人を想定して書いているつもりだ。

もう一つのねらいは英語をあくまで手段として学習してほしいという願いが込められている。その意味で現代社会における情報の重要性を英語と絡めあわせることで、英語学習の重要性を強調している。

「日本人として生まれ、育まれてきたDNAを英語のなかに持ち込むことが肝要である。それがあなた自身の生きた英語となる。同時に相手はあなたのオリジナリティに注目することになる」とでもいえよう。

英語を覚えると人生得することがたくさんある。情報の面白さ、すごさを認識できることがその最たるものであろう。その上に新しい友情と国際理解が手に入り、自分の世界が実に大きく広がっていることにも気づくであろう。

私にとって最も忘れたくない体験を一つ挙げてみたい。

アメリカがイラク攻撃を始める直前、私はロンドンに向かっていた。アメリカの動きに不安を感じた友人からいろいろな情報が送られてきたことが最大の要因だった。なんとしても攻撃開始以前にロンドンに到着しておきたかった。情報を送ってくれた相手は、職業も住んでいる所もばらばらで世界中に散らばっていた。

ロンドンで亡命生活を強いられてきたクルド人は「なんとしてもロンドンに來い」と矢のような催促だった。アメリカのイラク作戦の全貌を教えてやるから、などと悩ましいことをいう。実は攻撃前に彼らは何度もアメリカの関係者から招請され「サダム・フセインの支配するイラクを最も効果的に支配するにはどうすればいいか」とたずねられ、その際にしたレクチャーの概要を教えてくれるというのだ。

オーストラリアの弁護士は「オーストラリア政府のやることを信じるな」と警告してきた。彼らはアメリカとイスラエルの強い影響下にあり、自主路線を貫けないのだという。アメリカのニューヨークからは「反戦デモが徹底して押さえられている、今やアメリカはポリス国家に成り下がった」と嘆いてよこした。ヨルダンのアンマンからは「アメリカとイギリスの蛮行に、ただただ口をあんぐり開けているばかりだ」と絶望的な知らせであった。

ブラジルのポルト・アレグレからは赤ちゃんを宿したという朗報だった。そして「新しい生命が宿ったことで、父も母も再び生まれ変わった。だから、ここでは新しく誕生した三人の人間が生命の驚異をかみしめている。それなのにイラクでは無数の子供や市民の命が散っていく」とその無力さを嘆いてよこすのだった。

Now, I should talk about my main subject, Japan's position in the world and Asia before going over to what international relations Japan is trying to build.

I will touch on certain significant developments in the world briefly which, I believe, will have a great influence on the development of Japan's external relations.

When we consider Japan external relations, all of us will certainly agree that the Japan US relationship is the most important and maybe the single most important factor. To us Japanese, the Japan US relationship is as vitally important as the relationship between Slovakia and the European Union is to you. Following the US, we are deeply concerned with what the future course of China will be, just as you are watching where Germany and Russia are going.

No doubt, China will become a powerful nation both economically and militarily. Yet China is expected to be challenged by such domestic problems as conflicts between different ethnic groups and among different military factions and China will try to protect its national unity. Despite these domestic difficulties, I believe China will manage to preserve its unity and will not become another Soviet Union, which was disbanded.

I say this because the overseas Chinese who have been living in other nations for generations

are beginning to resume contact with China, from where their forefathers came. Generally speaking, these overseas Chinese are successful businessmen, entrepreneurs and commercial leaders in their second home countries.

These shrewd and sensitive investors are now investing their capital, technologies and management know-how in China. Is this evident of inward, rather than outward, force acting on China?

The substantial and massive in flow of capital and technology initiated by overseas Chinese has already gone well beyond the Rubicon River. This is why I think that China has to make the utmost effort to remain unified at any cost and this should be ensured. Also, we should bear in mind that capital is a most sensitive and timid creature.

The combination of economically expanding China and the overseas Chinese who are active in other parts of Asia and in other countries will be a vast force affecting not only Japan but also the United States. The Chinese people both inside and outside China will probably change the world's balance of power eventually. However, I hope that all of you don't make any hasty conclusion that China will be a threat to the United States and rest of the world. Rather, China is quite likely to play

a conciliatory role in general by coordinating with the other Asian countries.

いよいよ本題である。ここでは中国とアメリカがキーであることを強調しながら日本の立場を解説した。もちろん、私自身の対アメリカ感も随所にはめ込んだ。講演会が終わったとき、何人かの人から「アメリカに対してはかなり批判的ですね」と指摘された。そのとおりである。自分としては、なんとしてもそれを強調したかった。

しかし、一〇年経って見るとそのプラス、マイナスがよりいっそう鮮明に見えてきた。ハンガリー、チェコ、ポーランド、スロバキア四カ国から学んだことだが、「Mr. Horiはradicalな人で、反米主義者である」という評価がこの地域で定着したからだ。

評判自体はそれほど気にしていない。指摘された場合も「いや、むしろ真の友人としてアメリカには物申す立場を貫いている。彼らは極端なほど自己中心的で、他人の言うことには耳を傾けない。だからこそ言い続ける必要がある。それは私の信念であって、決して反米主義であるわけではない」と説いているが、いったん定着してしまったイメージはなかなか修正できないものだ。情報の恐ろしいところである。

しかし、私としてはねらいの一つでもあったので使命は遂行されたといえる。

おわりに

この類の本についての構想は一九八〇年代初頭からどこか頭の片隅にあった。いやもつと前から何とか形にしたいという思いはあった。その動機は、初めて海外駐在員としてオーストラリアのシドニーに赴任した一九六九年のことに違いない。着任直後に感じた外国語へのアレルギーに端を発しているからだ。それ以来、この年まで、アレルギーというか強迫観念に悩まされ続けてきた。もっと端的に言えば、終戦直前にこの世に生を受けて以来、私の存在そのものにまわりついてきた厄介な問題だったと、今振り返ってみても断言できる。幼少のとき、自分の存在を漠然ではあったものの意識したとき、私の環境はすべてアメリカ進駐軍に取り囲まれていた。どこへ行っても彼らの一挙手、一挙動に惑わされない日はなかったといってもいい。生まれ育った横浜は空襲でわずかに焼け残った施

設はむろんのこと、焼け野原となった土地でさえ、そのほとんどを進駐軍によって占拠されてしまった。こうして有刺鉄線で囲い込まれてしまった元町、関内、中華街のある山下町、国鉄の終着駅だった桜木町、租界地（外国人居留地）として名高い山手、そして商業の中心地だった伊勢佐木町界隈を中心に私は幼少期を過ごすことになった。こうして知らず知らずの内に天国と地獄を体験する羽目になった。

子供の喧嘩にもきまって朝鮮人、中国人、インド人、そしてアメリカ進駐軍の家族などがかかわってくる厄介な土地であり、まさに一種の国際租界であった。となれば敗戦国民とはいえ、知らずのうちに彼らに負けたくないという意識が心の中でいつしか増幅され、時には大人さえ巻き込んだの大げさな争いに発展することもしばしばだった。小学校に進学したころ、巷には私どもとまったく皮膚の色も顔の造作も違う、いわゆる国際結婚によって生まれた異質の背景をもった子供たちと接触する機会も日ごとに増えていった。確か、私が小学校四年になったときだった。横浜市の教育委員会は彼らの受入れ実験校として元街小学校を指定、その途端、彼らが大学して入学してきた時の驚きはまさにカルチャーショックそのものだった。

同時に、良家の子女は、どこでどんなつながりをアメリカともっていたのか、突然アメ

リカに留学するとかで横浜の大棧橋の波止場から氷川丸、あるいはクリーブランド・ウィルソン号などの外航船に乗って出港する。その華やかな姿を見送る時代に突入していった。振り返れば、こうした環境が外国語、すなわち私を英語嫌いにしたのではないだろうか。

以来、英語と聞いただけで反射的に拒絶反応を示し、中学での英語授業は散々な成績だったことを本文中にも書いた。

時が経ち、成人して最初に海外赴任したシドニーでは癖のあるオージー英語の洗礼を受けて辟易し、何度聞き直しても単語のスペルさえ完全に書き取ることができなかった。イタリア人の経営する街角のミルク・バーではサンドイッチという言葉さえ通じなかった。笑えないのは相手が「どんなウィッチ（魔女）をお探しですか」と聞き直してきたことだった。その絶望感。

しかし、こうした挫折がやがて逆バネになり、いつしかそれに挑戦する気力を呼び起こす遠因となった。ただ、こうした経験も長い人生から見れば小さなエピソードの一コマに過ぎず、結局はこの年まで英語に苦しめられ、生きていく上で大きなハンディキャップとなってきたことは否めない。

なぜだろう、と時に考えるが、おそらくそれは日本語同様に外国語が私にとっては絶対に欠かすことのできない手段だったからだろう。目的だったら、その究極の目標に向かつて進むだけだから、それほど苦しまなかっただろうし、引きずらなかったはずだ。好奇心が人並み以上に強かったこともあるが、私の場合、興味の対象が多岐にわたり、またいづ別の分野に関心が移ってしまうか、自分でさえ予測できなかった。それに応じ対象となる仕事も国も変わるので、そのたびに新たな対応を求め、初めからやり直す羽目になる。仕事の面に絞ってみてもどれほど仕事を替えてきたか、あるいはいくつかの仕事を同時並行してやってきたか、履歴書を洗い出さないと正確には思い出せないほど動き回ってきた。その結果、関係した国も多くなった。雑駁な記憶を辿れば、オーストラリアに七年半、アメリカ・ニューヨークにある財団に九年、チェコのプラハに一〇年、そして国際ペンの仕事でロンドンに一二年、と携わってきた。その間、やれ会議だ、大学での講義だ、という予定外の仕事が入ってくるので休むことのない半世紀だった。もちろん、対象国は英語圏ばかりではないから、時に言葉に不自由する。しかし、仕事に関する限り英語は世界語で、どこへ出かけても英語で勝負をすることが可能だった。

こんなドタバタの生活が続いたものだから、机に向かってじっくりものを書くという時間もなかなかつくれなかった。結局、その時々思いついたことを空港の待ち時間を使い、あるいは機内で書き留める。ホテルでも同様で、部屋についているメモ帳、あるいは時間に余裕があれば浮かんだアイディアをパソコンに入力、そんなつぎはぎ原稿を積み重ねてきた。だから本の形にするまでには最短でも一〇年、一五年は容易にかかってしまう。ある意味では熟考に熟考を重ねた結果だと言いたいが、私の場合はまったく逆だった。忘れてしまったことを、まるで新しい発見でもあったかのように喜び勇んで再び書き足したりする。編集者から重複ですね、と注意・削除されること数知れず。その上、時系列的感觉さえ失せてしまう。自己弁護かもしれないが、手段としての英語に長年苦しんだ最大の理由はアメリカの日本占領に始まり、そして日本の文化、体制、社会秩序をすべてアメリカ化しようとする彼らの壮大な思惑に振り回されてきた結果だ、ということを強調したかったからだ。

しかし、終戦後七〇年を過ぎ、ようやくこの事態も変わりつつある。経済、政治の面ではない、ただ英語という外国語に向き合う日本人の姿勢、態度に関してである。

最近の顕著な現象なのだが、かつての学生、あるいは同窓の仲間に出会ったときまで彼ら

が言うのは、「あれほど悩まされた英語が最近よく理解できるようになったのはなぜだろう。トランプ大統領のスピーチを聞いていても実によく理解できるのだ。昔、巻き舌でしゃべる米語はまったくフォローできなかったのになあ」。感慨に満ちたコメントだ。私は待つてましたとばかり持論を展開、解説に及ぶ。

「そうなんだよ。我々は英語に関してはアメリカ人に自信を持てるようになった、いや対等に議論できる立ち位置に到達したっていうことなんだ」と。

大抵の場合、連中は怪訝な顔をする。さらに追い打ちをかける。

「知っている？ トランプのしゃべる英語、いや彼の語学力はせいぜい中学生程度だったことを。いや、私の意見ではない、アメリカの識者が彼のスピーチを詳しく分析した結果なのだ。その上すべてをデイルとかいって街の不動産取引と同じ感覚でしか判断しないし、その上大統領に担ぎ上げた連中は大半が貧困層の白人だったことだ」

「要は、そういう連中が中学生レベルのスピーチに熱狂するのだから恐れ入ってしまう。ということとは、我々は大いなる自信をもって、日本式の英語で堂々と発信できるという証明なのさ。だから、彼らに堂々と、臆することなく、英語で持論を訴えられる時代がきたということだ。それを認識し、実行に移すべきだ」と、つい過激発言までしてしまう。こ

うなるとどこかの国の政治家の演説みたいで、仲間はきまって白けてしまう。しかし、間違いなく一理ある。反知性主義と大衆化の跋扈である。

敗戦国になった途端、日本の教育制度はアメリカの文化政策のなかに取り込まれた。その結果、新制小学校制度が発足、その第一期生となった私は結局、英語を含めアメリカの文化政策のなかにどっぷり取り込まれたまま生涯を過ごすことになった。いま社会を騒がせている小学校での英語教育の義務化はその意味できわめて重要な問題と言える。もともと国民的レベルで時間をかけ、深い議論をした上で決めるべきではないか。政府はただひたすらグローバル化の掛け声ばかりで、次の世代に与える真の本質的な結果を熟考、検証することなく一気に制度化しようとしている。壮大な無駄な努力に思えてならない。

❖ 著者略歴

堀 武 昭（ほり・たけあき）

作家、経済人類学者。オーストラリア外務省（豪日交流基金）アドバイザー、米日財団副理事長、フォーラム2000財団理事、関東学院大学助教授、政策研究大学院大学教授、チェコのカレル大学客員教授などを歴任。表現の自由と作家の相互理解を図る文筆家組織「国際ペン」の理事に選出される（2002-10年）。2010年9月に専務理事、2016年に副会長に就任。

著書として、『ペンは世界を変える——行動する文学者集団の90年』（長崎出版、2010年）、『「アメリカ抜き」で世界を考える』（新潮選書、2005年）、『世界マクロ摩擦!』（新潮文庫、2003年）、『サシミ文化が世界を動かす』（新潮選書、2001年）、『東欧の解体 中欧の再生』（新潮選書、2000年）、『オーストラリアの日々——複合多文化国家の現在』（NHKブックス、1988年）、『反面教師アメリカ』（新潮選書、1999年）、『Tuna and the Japanese』（日本貿易振興機構、1996年）、『マクロと日本人』（NHKブックス、1992年）など多数。

「二刀流英語」のすすめ

情報力・英語力を使いこなす

2018年10月11日 初版第一刷印刷

2018年10月17日 初版第一刷発行

著 者 堀 武昭

発 行 者 森下紀夫

発 行 所 論 創 社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装 丁 奥定泰之

編集・組版 永井佳乃

印刷・製本 中央精版印刷

©Hori Takeaki 2018 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1713-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。